

周辺の
みどころ

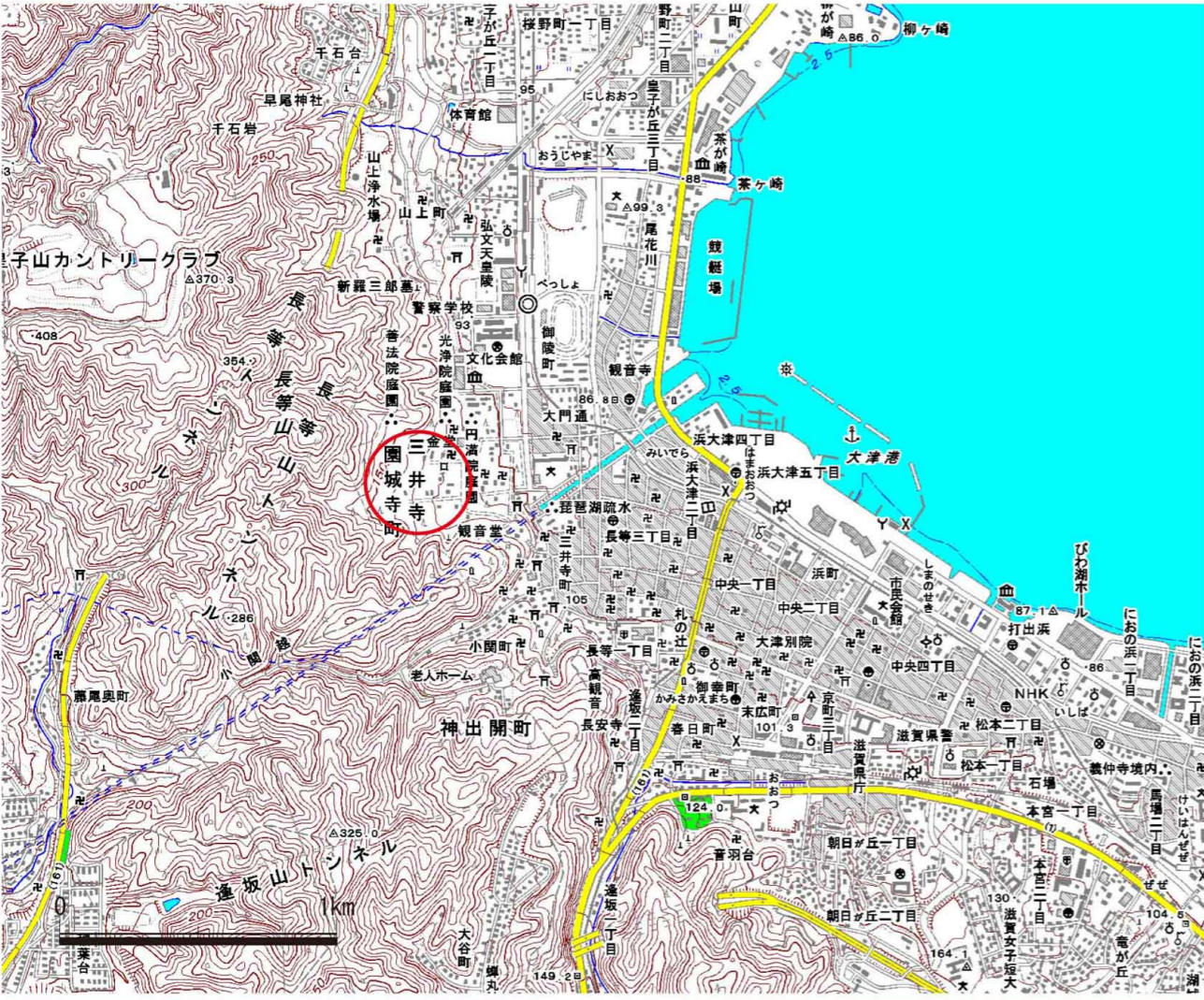
法明院は三井寺境内の最北端に位置する子院であり、江戸時代初期の創建後、一時廃絶し、享保8年(1723)に再興された。

高台に築かれた境内には、山中から湧き出る清水を引いて造った池泉回遊式庭園が広がり、琵琶湖や三上山を借景としている。

明治時代にお雇い外国人教師として来日し、日本美術の研究に功績を残したアーネスト・フェノロサ(1853~1908)は、風光明媚なこの地を愛し、遺言により法明院に埋葬された。現在も、境内の奥深くにフェノロサの墓が営まれ、遺愛の品々が寺に残されている。



法明院フェノロサの墓



[アクセス]
●京阪電鉄石山坂本線三井寺駅下車 徒歩10分

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]
(関連文献/関連施設)
●福家俊明ほか著『古寺巡礼 近江4 三井寺』、淡交社、昭和55年
●大阪市立美術館ほか編『智証大師帰朝1150年特別展 国宝 三井寺展』、平成20年

おんじょうじ みいでら
園城寺 (三井寺)

大津市園城寺町



関伽井屋内の霊泉

天智寺門宗総本山の園城寺(三井寺)は、琵琶湖の南西、大津市長等山一帯の広大な敷地に伽藍を構えている。三井寺の寺名は、境内にある霊泉が由来とされる。この霊泉は、天智・天武・持統天皇が誕生の際、御産湯に用いられたと伝えられる。このことから「御井の寺」と呼ばれ、これが転じて「三井寺」となった。古くは、この霊泉に龍神が住んでおり、年に十日、深夜の丑の刻に姿を現わし、金堂の弥勒菩薩に供物を捧げると伝えられた。金堂横の関伽井屋(重要文化財)内では、寺名の由来となった霊泉が現在も絶えることなく湧き出ている。





園城寺金堂（国宝）

園城寺（三井寺）

所在地 大津市園城寺町

三井寺の歴史

寺伝によると、三井寺の創建は天智天皇（627～671）の皇子である大友皇子（648～672）の邸宅にさかのぼる。後に壬申の乱で敗死した皇子の菩提をとむらうため、子の与多王が天武天皇の代の686年に寺を建立したと伝えられる。

創建に関わる伝承については明らかにしがたいが、金堂付近からは7世紀後半の軒丸瓦が出土しており、天武天皇の時代には当地に寺院が建立されていたことは確実である。

平安時代に入り、^{ちしやうだいしえんちん}智証大師円珍（814～891）が三井寺を再興した。^{さぬきのくに}讃岐国に生まれた円珍は比叡山で修業の後、仁寿3年（853）に入唐して天台密教を学び、多くの経典・法具類を携えて天安2年（858）に帰国を果たした。貞観4年（862）には別当として三井寺に入り、その4年後には三井寺が天台別院となる。しかしながら、円珍の入滅後、延暦寺において円珍門徒と^{えんにん}円仁門徒の対立が激化し、正暦4年

（993）には、円仁門徒によって房舎を破壊された円珍門徒が山を下りて三井寺に移り、天台教団は山門（延暦寺）と寺門（三井寺）に分裂する。

平安時代より権門寺院として朝廷や摂関家の庇護を受けた三井寺は、東大寺、興福寺、延暦寺と並ぶ大寺院に発展する。一方で、延暦寺との抗争や源平合戦、南北朝動乱による焼き討ち、豊臣秀吉による所領の没収（^{けつしよ}闕所）など、度重なる災難に遭遇するも、そのたびに復興を果たしてきた。

三井寺の文化財

三井寺は文化財の数が多く、国指定文化財だけでも50件以上に及び、国内でも屈指の規模を誇る。

代表的な建造物では、慶長4年（1599）に再建された金堂（国宝）のほか、円珍の^{びやうしよ}廟所として寺内で最も神聖な場所とされる唐院大師堂（重要文化財）、桃山時代を代表する初期書院



左 智証大師像
（滋賀県指定文化財）

右上 春の園城寺境内

右下 梵鐘
（滋賀県指定文化財）



の^{こうじやういんきやくだん}光浄院客殿（国宝）、^{かんがくいんきやくだん}勧学院客殿（国宝）等があげられる。

美術工芸品では天台密教に関係する仏教美術が多い。とりわけ、円珍に関わる仏像・仏画類は秘仏として厳重に安置されている。そのうち代表的なものとして、円珍が修行中に感得した金色の不動明王を描いた絹本著色不動明王像（^{きふどうぞん}黄不動尊）（国宝）、円珍の入滅後、弟子たちによって造られた2軀の智証大師坐像（国宝）、入唐中の円珍が師から授けられたご五部^{しんかん}心観（国宝）、円珍の請来経典や自筆書状からなる智証大師関係文書典籍（国宝）がある。仏教美術以外でも、勧学院客殿障壁画（重要文化財）や光浄院客殿障壁画（重要文化財）等があげられる。特に前者は、桃山後期画壇の絵師狩野光信の代表作として知られている。

近江八景と三井寺

三井寺は、近江八景のひとつ「三井の晩鐘」として、湖国に欠かせない景観であり、古くから文学や芸術の分野において格好の題材を提供した。

現在の梵鐘（滋賀県指定文化財）は、「弁慶の引きずり鐘」の異名で知られる初代の梵鐘（重要文化財）に次ぐ二代目で、慶長7年（1602）に铸造された。総高2メートル、重量2トンを越える巨大な鐘であるが、音色の良さはつとに知られ、古来より日本三名鐘の一つ「音の三井寺」として、「姿形の平等院」、「銘の神護寺」と並び賞されている。現在も除夜の鐘をはじめ、様々な法要において大津の町に音色を響かせている。